

英語編(2年次)

生きた英語で積極的にコミュニケーションをする生徒の育成(2年次)

～協働的な言語活動を活性化するための授業デザインの研究～

小田 可南子, 鎌田 亮祐

Kanako ODA, Ryosuke KAMADA

概要

学習指導要領解説では、急速に進むグローバル化の中で、外国語によるコミュニケーション能力が、生涯にわたって多様な場面で必要とされることが明記されている。このことは、単に質問に答えたりするだけの表面上のコミュニケーション能力に留まらず、英語を使って未知の状況下においても、主体的に考えて様々な問題を解決することができるコミュニケーション能力の必要性を示唆している。本校英語科では、学校、地域社会、世界の人のつながりを通して、生きた英語力を涵養させることを目的としている。この目的を果たすために、対話を軸とした「必然性のある協働的な学び」を授業で位置付ける。このことは新たな価値観を生み出すだけでなく、「ことば」や「人」に対して生徒の寛容性を育ませることができると考える。また、外国語によるコミュニケーションの見方・考え方においても、外国語やその背景にある文化、社会、世界、他者との関わりに着目しながら言語活動に取り組みさせることが不可欠であることから、協働的な言語活動を活性化させるための手立てを講じた。

キーワード： 生きた英語, コミュニケーション能力, 協働的な学び, 寛容性, コミュニケーションの見方・考え方

1. はじめに～研究の目的

文部科学省の英語教育の在り方に関する有識者会議では、「国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって不可欠である」と述べられている。学習指導要領では、「外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」と述べられている。このことを受けて、中学校3年間で、生徒が問題意識をもったり、他者との関わりを通じ、課題を解決したりすることがコミュニケーション能力の育成につながるかと考える。例えば、自分の力だけでは課題を達成することが難しいことを自覚させ、自分に不足していることや今後学ぶべきことに気付かせる。その結果、他者と協働することに対する必然性をもたらし、さらには生徒の主体性を育む。和泉伸一(2016)は、実生活とのつながりのない英語を「死んだ英語」と呼び、「コンテキストがあると、英語が生きてくる」*1と述べている。ここでいうコンテキストとは、コミュニケーションの目的、場面、状況のことである。「生きた英語」を習得するためには、このようなコミュニケーションの目的、場面、状況を意識した言語活動や多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることが求められる。

2. 生徒の実態(1年次研究の成果と課題)

本校英語科の1年次研究では、「学びのセルフ・マネジメント」について実践研究を進めてきた。英語科において、1年次は生徒、「個」に注目し、PIMを活用し、ゴール設定や自己の学習の振り返りをした。PIMを通じて、見通しをもちプロジェクトを進める力やうまくいかないことがあった際に、自己の練習方法を修正したり家で補充的に取り組んだりしたという意見が多くあった。これは粘り強くプロジェクト学習に取り組んだ現れなのではないかと考えた。また、生徒はプロジェクト学習を通じて、他者に分かりやすく表現するためにはどうすればよいかを試行錯誤しながら取り組むことができた。

英語科における2年次研究の切り口となる課題が2つある。1つめは、英語学習における「粘り強さ」に関する点である。昨年度2月に「英語学習における粘り強さとはどのようなことだと考えますか。」という質問項目でアンケート(90人回答)を行ったところ、以下のような回答があった。

・分からなくても**友達と**考えて最後まで考えること。
・分からないことがあってもあきらめずに調べたり、**人に聞いたりすること。**
・分からないことがあっても**友達と**考えたり様々な手段を使ったりして**理解できるようにすること。**
・あきらめず、**どんな方法を使っても良くすること**
・分からない問題にあったときにすぐに放り出すのではなく、**友達や先生の手を借りながらも達成すること。**

生徒の回答

興味深いのは、これらの回答は全て英語の学習において、高い学力を有する生徒のものであるということだ。これらの回答に共通する「粘り強く」とは、自分の力で最後までやり抜くということよりも、「友だちと考えながら、理解していくこと」、「友だちと考えるよりよくすること」という捉え方をしているということがわかった。また、英語を苦手としている生徒ほど「わからないことがあっても1人でやり抜くこと」「1つの課題に最後まであきらめずに取り組むこと」という認識をしていることも明らかになった。

2つ目の課題は、プロジェクト学習における「再構築」の場面で、自己の発表をより良くすることに意識が偏りすぎた結果、他者との協働によって得られる達成感や充実感にまで至らなかった点である。

以上のことから、「協働的な学び」を学習活動に位置付けていくことが英語の質を向上させるだけでなく、英語を苦手とする生徒にとっても、仲間との学びを通して達成感を得られるような場面を意図的に授業内に入れていくことが肝要であると考えます。

2. 1. 目指す生徒像

- ・多様な方略を用いながら、自己の英語力を向上させることができる生徒
- ・自己の役割を認識し、課題解決に向けてエージェンシー^{*2}を発揮することができる生徒

3. 研究主題及び副題

「生きた英語」を習得するためには、コミュニケーションの目的・場面・状況を常に意識した上で英語を表現する必要がある。授業では、実際のコミュニケーションの目的・場面・状況を意識させられるように題材を活用し、場面設定を具体的に行う。教室内で、意味ある表現活動を実現させるためには、生徒が当事者意識をもって考えられる課題設定が必要である。また、その課題解決に向けて分析したり、価値判断したり、話し合ったりするペアやグループでの協働的な学びが新たな考えや価値観を生み出し意味のある言語活動となると考えた。

以上のことから、本校の英語科の2年次研究の主題と副題を以下のように設定した。

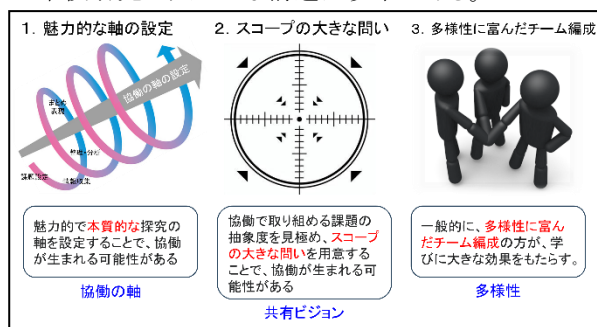
生きた英語で積極的にコミュニケーションをする生徒の育成(2年次)
～協働的な言語活動を活性化するための授業デザインの研究～

4. 研究の内容と方法

本校の2年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえた学びに向かうために、様々

な側面から「協働」を考えることが重要であると捉えている。

本校研究の大まかな構造は以下である。

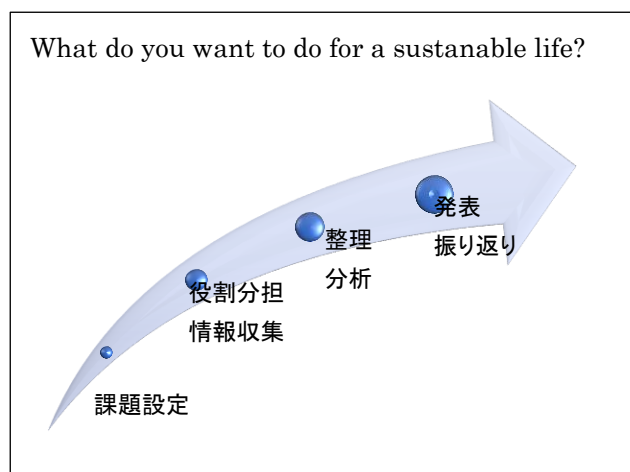


本校2年次研究の構造図

この中で、本校英語科では、特に「共有ビジョン」及び「多様性」に焦点を当てて実践研究を進めることとした。これらが、「2. 1.」で示した目指す生徒の育成に向かう上で特に重要な視点であると考えたためである。

4. 1. 本質的な問い(スコープの大きな問い)をゴールとしたプロジェクト型の学習(実践1)

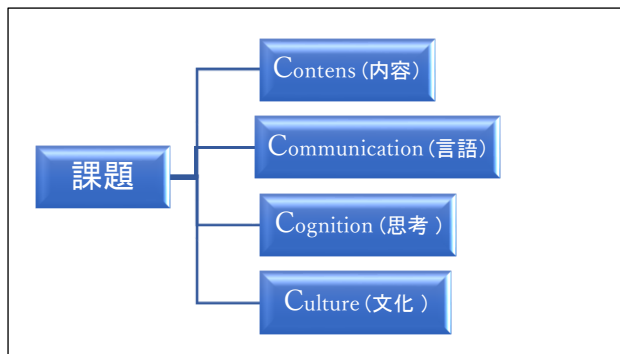
本校英語科では、以下のような流れでプロジェクト学習を進めていく。



「本質的な問い」を位置付けたプロジェクト学習の構想

このプロジェクト学習では、「What do you want to do for a sustainable life?」という大きな社会的な問題をゴールとした。生徒はSDGsにおける17Goalsの中から、生徒個人の興味・関心に基づき、同じトピックを選んだ者が集合し、teamとしての課題を設定する。Kagan(2021)が、teamは「何かしらの課題や目的・目標を共有する者たちの集団」としている。例えば、SDGsのゴールの1つである『質の高い教育』を選択した場合、teamとしての課題を設定した後に質の高い教育を達成するための方法を多様な観点から考える。このように、大きな問いを設定したことで、様々な観点から生徒は思考、価値判断をすることができ、そのためには協働による学びを位置付けることが必要だと考えている。

4.2 一人一人がエージェンシーとなるような役割の明確化(実践1)



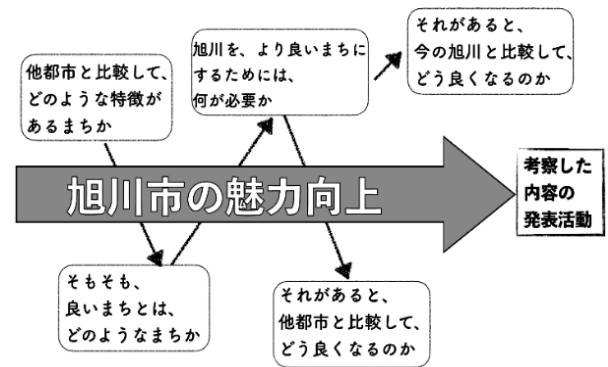
プロジェクト学習における役割分担を明確化した4つの【C】

Kagan & Kagan (2004)は協働学習の基本原則をPIESという形にまとめて説明しており、その原理は、Positive Interdependence (肯定的相互依存), Individual Accountability (個人の責任), Equal Participation (平等・公平な参加), Simultaneous Interaction (同時相互作用)である。この原理をふまえて本プロジェクトでも上記4つのCを位置づけた。Contents(内容)は、その選択したSDGsのゴールについて「内容」を調べる。

Communication(言語)は、ゴールを達成するために必要な語や表現が何かを考える。Cognition(思考)は、客観的データや調べたことを基に分析する。Culture(文化)は異なる国や地域について調べる。これら4つの視点は、いずれか一つだけでは課題を解決することは難しく、相互に関連し合いながら統合されることで初めて有効に機能する。そのため、自然とチームで学び合い、教え合うような協働的な学習プロセスが生まれると考えた。生徒一人一人が人や物事、環境がよりよいものとなるような影響を与えるエージェンシーになることを可能とすると考えた。

4.3 活動の軸を明確化した探究的な学習(実践2)

2つ目の実践として取り上げるプロジェクト学習では、「住みよいまちとは、どのようなまちか」という問いを設定して旭川を見つめさせた。教科書の登場人物が故郷のアリゾナを紹介する場面があり、その文章を参考に自分が住む都道府県を紹介する活動が設けられている。この活動を、比較表現を用いて旭川市を紹介する活動として取り扱うことにした。単なるまちの紹介や他都市との比較のみならず、自分たちが思う住みよいまちと現在の旭川を比較させたり、住みよい旭川をつくるために何ができるかを考えさせたりした。



旭川市の魅力向上を軸とした探究的な学習のイメージ

4.4. 他者参照を基盤とした学びの深化(実践2)

このプロジェクト学習では、教室内に協働的な学びを実現することをねらいとし、生徒が知っていることや調べたこと、感じたことを、ICT 端末を使用してまとめ、クラウド上で共有した。他者の知識や考え及び、それまでに自身が考えたことを適宜参照することで、自発的に学びを深化させることをねらった。

5. 実践と考察

本稿では、以下2つの実践について述べる。

5.1. 単元名(実践1)

単元名 ONE WORLD English Course 3
Project1 「CMをつくって発表しよう!」〜よりよい社会をめざして【話すこと(発表)】

5.2. 単元の構想(実践1)

本単元の教科書では、自分たちが困っていることを基に実際にあったらいいと思う商品やサービスをグループで考えプレゼンテーションすることになっている。しかしながら、本プロジェクトでは1年次の Lesson9 「Helping the Planet」や2年次での Lesson2 「Our Energy Sources」、Lesson3 「Design in Our Life」など環境問題や自然科学、社会に関する教材など各学年の学びを生かした指導をすることで、3年間での学びが点ではなく線として生かせると考えた。また、本校の総合的な学習の時間においても、SDGsについて学習しており、世界的な視野に立ち、自分たちに出来ることは何かということを考え、考案したアイデアをCM制作にして発信させる活動を通して、教科横断的な指導にもつながると考えた。

本単元では、協働してSDGsについて考えるため、本単元のスタートにあたり、第3学年の生徒(90名)に他者と協働して英語学習に取り組むことに関して、以下のような実態があることが分かった。

①英語学習において仲間との「協働」を通して学習することは大切だと思いますか。

かなり思う	39.8%
思う	31.2%
あまり思わない	17.2%
思わない	11.8%

②なぜ「協働」を通して学習することが大切だと思いますか。

- ・テストのための勉強ではなく、英語は誰かと会話することで真価を発揮すると思う。
- ・仲間と「協働」することで、言葉の使い方やより発展的な学びにつながると思う。
- ・仲間と話し合うことで新しい考えが生まれる。
- ・自分が分からないときに仲間が助けてくれると自分で学習するよりも身につくと思う。
- ・今後の社会ではそのような力（協働する力）が必要

このことから、約 70%の生徒が仲間との「協働」を通して学習することが大切だと思っている。その中には、仲間と「協働」することが自己の英語力のスキルアップにつながったり、「協働」することが発展的な学びにつながったりすると実感している生徒がいた。また、「協働」することが今後の社会においても必要とされる力であると考えている生徒がいることもわかった。

本プロジェクトの概要は以下である。

時	学習内容
1	○SDGs について知る ○テーマ課題選択
2	○Project Mapping を使用した課題設定と情集
3	○Project Mapping を使用した原稿作成
4.5	○OCM 制作
6	○テーマ別のグループ共有
7	○グループ共有から得た内容を取り入れた原稿・スライド修正
8	○テーマ別のグループ CM 発表
9	○プロジェクトの振り返り

5. 3. 授業の実際(実践1)

本プロジェクトにおける各時間の実践を以下で示す。

【1時間目】1, 2年次で学んだ SDGs に関連した題材をデジタル教科書で振り返らせたり, 17Goals についての動画を視聴させたりした。生徒は1年次に, 自然科学, 2年次では福祉, エネルギー問題, 科学技術, 職業, 水問題など6つの SDGsに関する題材を学習している。学習したことを, 何ができるのかということ自分事として考え, 協働で課題を解決するための方法やアイデアを考え, 世界に発信することをねらいとした。

今日の振り返り	次回特に必要な練習や調べること
みんなが納得してくれるキャッチコピーを考えようとしたが、時間が足りずにその手は終わってしまった	・キャッチコピーの思考

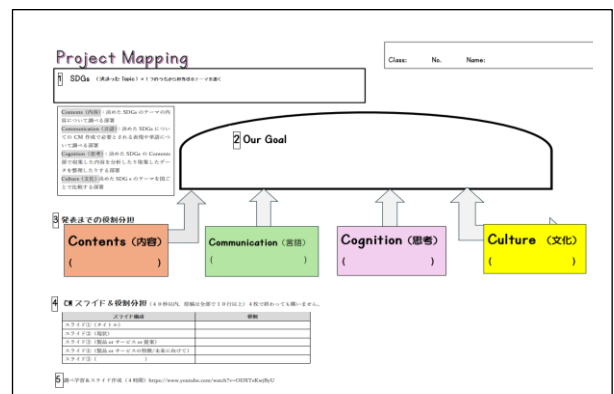
生徒 A の PIM 記載

今日の振り返り	次回特に必要な練習や調べること
今回は役割分担をし、どうしよう方向性でCMを作るのが、得るメッセージとすることをグループで話し合い、決めることができた。話し合いの中で自分の意見を伝える、というのを一番意識して積極的に活動に取り組めた。	SDGs は今どういう現状なのかをさらに具体的に調べる。特に日本と世界各国の比較を追求する。

生徒 B の PIM 記載

それぞれの生徒が、キャッチコピーを考えたり、どのような CM を作ったりするのか、何をメッセージとするのかをグループで考えたことが伺えた。

【2時間目】本プロジェクトでは、Project Mapping を使用し、グループとしての課題を設定し、役割分担を明確にした。以下が Project Mapping である。表面には、大きな問い「What do you want to do for a sustainable life?」に対して、Our Goal としてそれぞれのグループの課題を設定する。さらにその下には、4つの役割に分担した。裏面には、自己の役割でわかったことをメモすることや他のグループからもらったアドバイスなどを記載する内容となっている。このワークシートを土台として本プロジェクトを進めた。

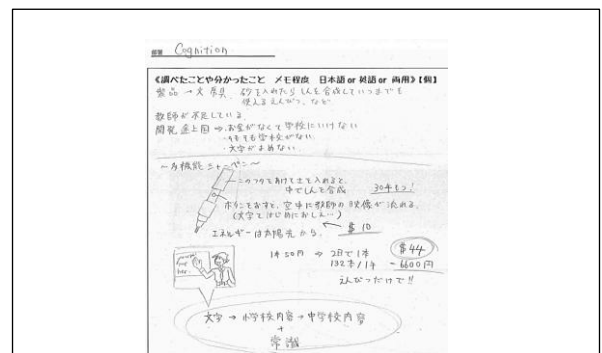


Project Mapping 表面



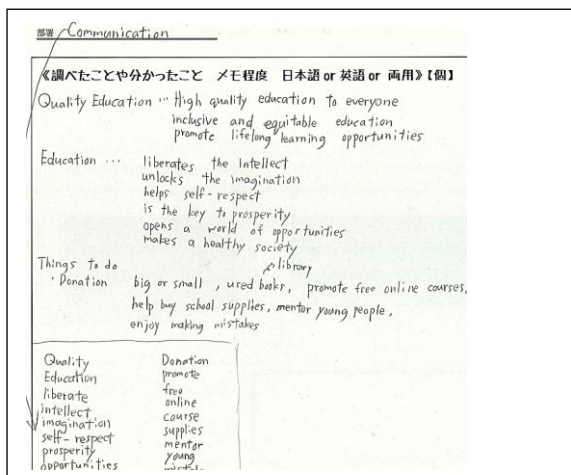
Project Mapping 裏面

Project Mapping を活用したことで、一人一人の役割が明確となり、個で調べたことをグループで共有しやすくなった。以下が生徒の記載した Project Mapping である。



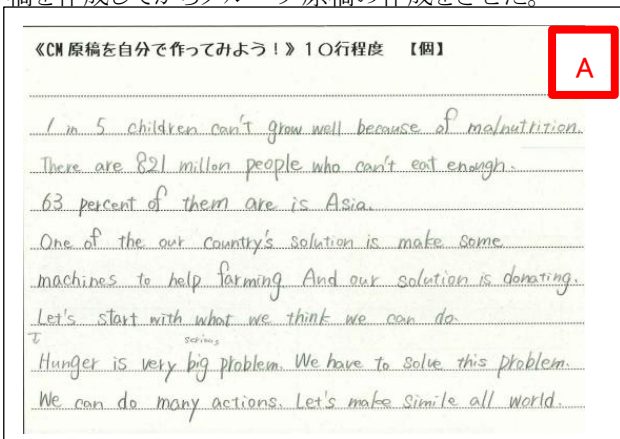
「質の高い教育」を選択したグループの Cognition 担当生徒

この生徒は、発展途上国の現状を理解した上で、販売価格や製品の機能について考えている。

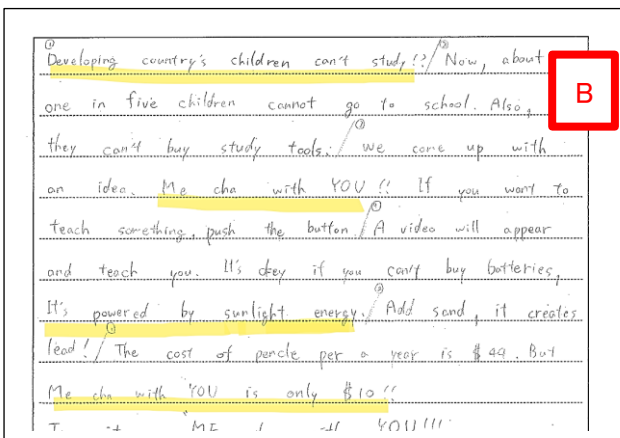


「質の高い教育」を選択したグループの Communication 担当生徒
この生徒は、使えるような語彙や表現をあらかじめ調べていることが伺える。

【3時間目】前時で調べたことを集約し、まず個で CM 原稿を作成してからグループ原稿の作成をさせた。



「質の高い教育」を選択したグループ 生徒 A

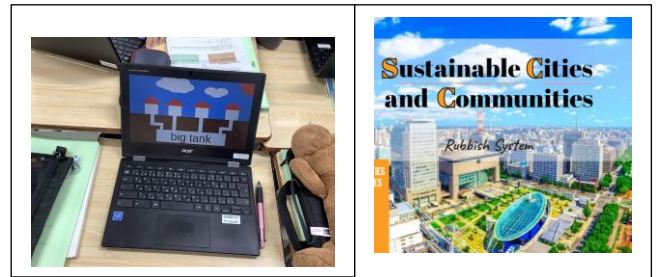


「質の高い教育」を選択したグループ原稿

Aはある生徒が書いたものであるが、グループでの話し合いを通じて、発表原稿の開始文の語尾にイントネーションの上昇を置くことや、製品名を追加した点やア

フリカの気候を考えて、電池ではなく太陽エネルギーを使用する製品であることなど、よりCMということを踏まえてインパクトをもたせたいというグループでの話し合いにより決定したことが伺える。

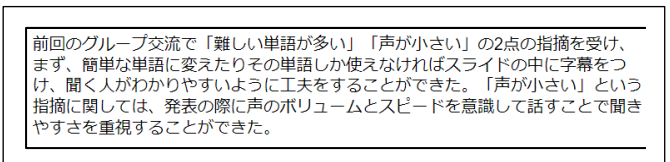
【4・5時間目】生徒は、Google スライドを使用して、共同編集をしながら CM 作成をした。



「住み続けられるまちづくり」を選択したグループ

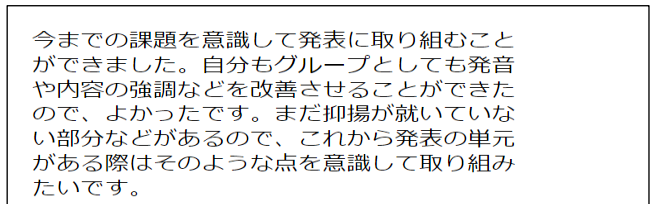
【6時間目】17Goals のうち、同じ項目を選んだグループ同士で発表リハーサルをし、互いのグループで「内容面」、「形式面」、「発表面」の観点から互いのグループにアドバイスをした。本プロジェクトにおける「内容面」は①世界の現状を伝える②その現状をふまえての製品または提案③その製品の特徴、これら3項目が盛り込まれているかに焦点を当て、「形式面」は使用されている語彙や表現がふさわしいか。「発表面」は声の大きさ、抑揚、ジェスチャーの使用がふさわしいかなどを考えさせた。そして、他者に分かりやすい CM を作成することについて、場面、目的、状況をふまえて考えさせた。交流では、「具体性をさらにもたせた方がよい」、「複文だと聞いている人が分からなくなるから単文にしたほうがよい」、「製品名をもう少し強調したほうがよい」などのアドバイスをしていた。さらに、「CM なので、短い時間の中でインパクトが大切だと思う」という意見があった。

【7時間目】前時のアドバイスを受けて、互いに原稿を読み合い、発表面の修正をしていたり、スライドの文字を少なくしたりするなど再構築をした。



再構築後の生徒による PIM の記載

【8時間目】グループで作成した CM を各クラスで発表した。さらに、発表後に、その発表に対してのコメントや感想を英語でやり取りをさせた。



生徒 A の発表後の PIM の記載

【9時間目】本プロジェクトの振り返りを行った。以下は生徒の感想である。

毎回、グループの人と活動できるので、より見やすいスライドを作るためにどうしたらよいかなどアドバイスを貰い、改善していきましました。そして、毎回の授業で、目標設定があるので、中身で質を高くしていくために何ができるかを自分で考えて改善していきましました。また、今回の学習では相手に対してどう見られているのかが大切になっているので、原稿を作っていく中での工夫点やどんな単語だとわかりやすいかとかグループの人とコミュニケーションを大切に、ただ伝えたいことを書くだけでなく、自分たちオリジナルのものを作り上げられるように改善していきましました。

生徒振り返りの一部①

上記生徒の振り返りを見ても、協働を通して、よりよいものを作成するためには、コミュニケーションを取ることが大切であると学んだことが伺える。

想像力と問題解決能力が高まったと思います。SDGs は日本だけでなく世界規模で考えなければならず、私たちの班の「働きがい・経済成長」というトピックでは失業率なのか、労働環境を整えるのかなどどこに焦点を当てるかを考えました。しかし、グラフで失業率を調べたり仕事をやめた理由のアンケート調査の結果を調べたりして問題の根本の原因であるサイクルを知り世界の状況を想像しました。調べたことを英語で発表しなければならないので、Communication 担当の人が中心となって、議論を重ねました。そして決めた視点と集めた情報から問題解決のためにどんな取り組みができるかを班でできたのでこの2つの力が伸びたと思います。

生徒振り返りの一部②

上記生徒は、協働を通して、大きな問いの中にもさまざまな視点があり、その視点をグループで試行錯誤したことが伺える。また、それぞれのメンバーが役割を果たしていたことが伺える。

後日、実際に留学生のナミビア人に発表を聞いてもらった。聞く対象者が中学生から英語を公用語として使用している対象者に変わったことで、話すスピードや単語に変化をもたせたグループもあった。このことは、外国語やその背景にある文化を社会や世界との関わりの中で事象を捉えたり、外国語やその背景にある文化を理解するなどして、相手に十分配慮したりすることが重要であることが生徒の発表から推察された。

5.4 単元名(実践2)

単元名 ONE WORLD English Course 2
Lesson6 Castles and Canyons～Tips for Speaking5

5.5. 単元の構想(実践2)

第2学年の生徒を対象に、令和6年5月から8月にかけて「英語を話すことは得意ですか」とアンケートで尋ねたところ、以下の結果となった。

【英語を即興で話すことを得意と感じない】

実施時期	5月	6月	7月	8月
%	58.3	62.0	61.6	60.2

【英語で発表することを得意と感じない】

実施時期	5月	6月	7月	8月
%	49.5	55.5	62.4	56.8

第2学年生徒 103 名を対象に実施したアンケート(4件法)から、「英語を即興で話すのは得意ですか。」「英語で発表することは得意ですか。」という問いに対し「あまりそう思わない」「全くそう思わない/そう思わない」を選択した生徒の割合を示している。

以上の結果から、過半数の生徒が英語を話すことに対してやや苦手意識をもっており、そうした生徒は増加もしくは横ばいの傾向にあることがわかった。また、学習指導要領に示される4技能5領域それぞれで同様に質問し、否定的な回答が半数を超えたのは、「話すこと(やり取り)」と「話すこと(発表)」であったことから、本学年の生徒に英語を話すことに対して自信をもたせることが必要であると考えた。

Lesson6 では、有名な建造物や観光地を題材に、比較表現の文を用いて、人物や事物についてやり取りする。Tips for Speaking では、メモを使った発表方法について学ぶ。この単元構成を生かすことで、特に「話すこと(発表)」の能力を向上させることをねらいとし、自分の住むまちについて、メモを活用して発表する学習活動が可能であると考えた。また、本校の総合的な学習の時間では「世界から見た旭川」と題し、旭川について調べ学習を進めていた。生徒が教科横断的な思考を働かせ、自ら学びを深化させることができるよう、「4. 3. 」および「4. 4. 」で示した学習活動の展開を計画した。

本プロジェクト学習の指導は以下の通り進行した。

時	学習内容
1	旭川市をより魅力的にする方法について考える。
2	比較表現の用法を理解し、人物や事物について説明したり、事物に対する価値観を交流したりする。
6	カルガリー大学から来日した留学生に、旭川の良いところや他
7	都市と比較したプレゼンテーションを行う。
8	アリゾナについての紹介文を読み、内容を理解する。
9	“as~as..”や“I like ~ the best.”の文を使って、級友や自分が好きなものについて紹介する。
10	教科書本文を参考に、旭川市を魅力的にする方法についてのプレゼンテーションを考える。

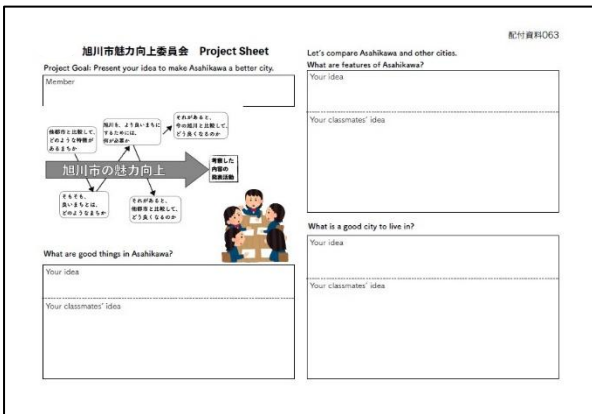
11	メモを活用した発表の練習を行う。
12	旭川市をより魅力的にする方法について、メモを活用して発表する。(パフォーマンステスト)
13	Lesson6 の振り返り

5. 6. 授業の実際(実践2)

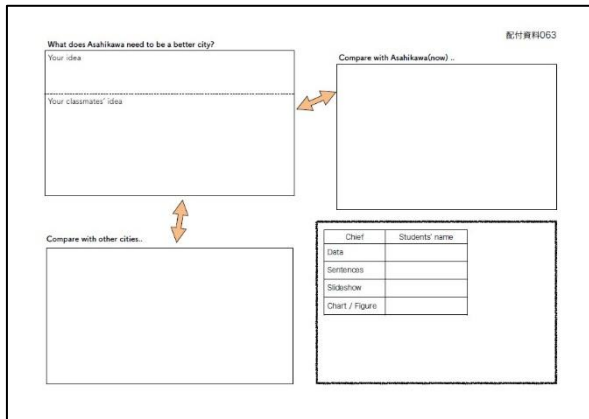
以下のように本プロジェクト学習を各時間、実践した。

【第1時】

生徒に「旭川市の魅力を向上させるためには、どうしたよいか」という問いを与え、本単元の目標を共有した。単元を通して生徒が考えたことをまとめることができるよう、プロジェクトシートを配付した。



プロジェクトシート表面



プロジェクトシート裏面

また、本単元で学ぶ比較表現の概要を理解させることをねらい、旭川市と札幌市を比較する英文を生徒たちといくつか考え、次時以降の学習に円滑に接続できるようにした。

【第2時～第5時】

各授業において、比較表現の用法を理解したり、教科書本文の内容を読解したり、表現の定着をねらった言語活動に取り組んだりした。

「4. 4.」に示した学習活動を、比較表現の用法を理解する段階で取り入れた。生徒はオンライン上に共有された表計算ソフトに、比較表現を使う際の留意点や例文を一斉に入力した。以下は、その一部である。

Points of "as...as"	Points of "the...est"
as+形容詞/副詞+asで表す。例) ~と同じくらいだ as+形容詞/副詞+as 例) She is as tall as her brother. as+as... ~と同じくらいだ 例) She is as tall as her brother. as+as... ~と同じくらいだ 例) She is as tall as her brother. as+as... ~と同じくらいだ 例) She is as tall as her brother.	as+as... ~と同じくらいだ 例) She is as tall as her brother. as+as... ~と同じくらいだ 例) She is as tall as her brother. as+as... ~と同じくらいだ 例) She is as tall as her brother. as+as... ~と同じくらいだ 例) She is as tall as her brother.

表計算ソフトのセルの様子

左側に-erを用いた比較級、右側に the -estを用いた最上級の情報が入力されている。授業の中で編集可能な時間を設け、それ以外の時間は編集権限を「閲覧のみ」にして管理している。

2つのものを比較して「○○は△△よりも～」ということを表す。
thanを使う。erを使うものもあれば、moreを使うものもある。
例) Pencil A is longer than pencil B.
例) Hokkaido is more beautiful than Tokyo.

生徒 A の記述

生徒は入力と他者参照を同時に行うことが可能であることから、他の生徒が入力していることを参考に、入力内容を修正・加筆する生徒の姿が見られた。

こうして作成した集合知を教師が同日添削し、次時の冒頭で振り返り、修正・加筆を繰り返すようにした。また、問題を解いたり、短い英作文に取り組んだりする際の参考資料とするように促した。

【第6時】

北海道教育大学旭川校に留学中であったカルガリー大学の学生が、本校を訪問することになった。学生らに英語で旭川を比較する機会を得ることができた。

本単元末の発表活動の練習と位置付け、プレゼンテーションは学習班単位で作成し、発表はシャッフルされたグループで各生徒が個人で行う。

本時で作成を完了させ、学習班内で発表練習を行った。また、班員の発表をふまえ、修正を行った。



学習班内で発表資料を作成する様子

【第7時】

本時は体育館で、学年単位で英語の授業を行った。3つの学級の出席番号をもとに 17 のグループを形成し、それぞれの生徒が旭川とカルガリーを比較したプレゼンテーションの発表を行った。留学生はグループをわたり、適宜生徒に質問したり、コメントしたりした。



体育館で発表活動に取り組む様子

各生徒の発表が終了したのち、生徒はオンラインフォームに、他者がどのようなことをテーマに発表していたかを入力した。教師はこの結果を分析・要約し、生徒が単元末の発表活動を構築する上での参考資料とできるよう、クラウド上で共有した。

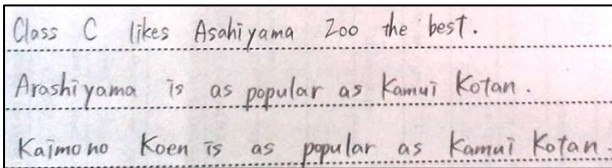
生成AIの分析	講師より
<p>### 6. "改高点や埋塞"</p> <p>- 旭川をよりよくするために、生徒たちは様々な埋塞を行っています。例えば、「旭川にディズニーランドを誘致する」などのユニークな提案も含まれています。</p> <p>- 旭川の強み（自然、食、観光）を活かしつつ、弱点（少子高齢化、観光資源の不足など）を補う方法を考える姿勢が見受けられます。</p>	
<p>### 7. "文化的な違いと共通点"</p> <p>- 旭川とカルガリーの文化的な違い（イベントや祭りなど）に触れる生徒も多く、特に旭川の「冬祭り」やカルガリーの「カウボーイ文化」が注目されています。</p> <p>- 両都市の共通点として、自然豊かである点や、橋や動物園といったインフラがあることが挙げられています。</p>	現状を他都市（カルガリー）と比較することができていたようです。私の強い印象を残してくれて嬉しいです。より多角的な視点から旭川と他のまちを比較してみましよう。思わぬ強みが見つけ出せるのではないのでしょうか。
<p>### 8. "観光・災害の少なさ"</p> <p>- 旭川は災害が少ない地域であることが強調され、これが住みやすさのポイントとして挙げられています。カルガリーも自然災害についての言及があり、両都市を比較しての安全性が論じられています。</p>	そうすると、旭川の抱える課題や、改高点が見いだせると思います。生成AIでは思いつかないようなアイデアが出ることを期待しています。
<p>### まとめ</p> <p>生徒たちは旭川とカルガリーについて、気候や自然、食文化、観光地、インフラ、社会問題など多岐にわたる視点から比較し、学びを深めています。特に旭川のラーメンや冬祭り、旭山動物園が強い印象を与えた一方で、少子高齢化や人口減少の問題についても真剣に考えている様子が見られました。</p>	

表計算ソフトのセルのイメージ

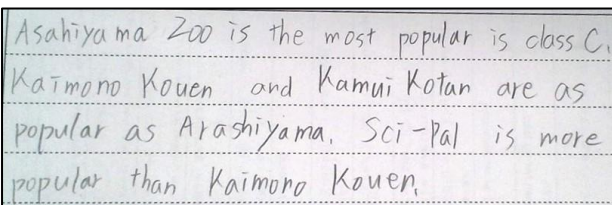
朱書き箇所は、生徒が参照しやすいよう、教師が強調した。

【第8時・第9時】

教科書の本文を読解し、“as~as..”や“I like ~ the best.”について集合知を形成した。その後、学級内で旭川市及び近郊の名所の人気投票を行い、これまでに学んだ比較表現を使って、級友や自分が好きなものについて交流する活動を展開した。



生徒 B の記述



生徒 C の記述

【第10時】

学習班でプレゼンテーション作成における役割を分担した。その後、第7時に生成した資料を参考に、どのような発表にするか検討し、作成を開始した。



生徒が作成したスライドショーの例

以下は生徒のリフレクション記述である。

[グループ内であなたが引き受けた役割を果たすために、あなたは何を意識しましたか。]

- 信憑性のあるデータを用いるために、市から出されているもので、できるだけ新しいサイトを探して伝えた。
- スライドの構成を主に考えてできるだけ早くスライドの骨組みを完成させることを意識した。
- やるべきものから順序立て、自分の仕事は絶対後の方だと考えたため、班のメンバーの仕事を手伝いに行き、ある程度の役割分担をしたが、ほとんど全員で同じことを一気にやってみようという方向に変えたこと。

【第11時】

学習班でプレゼンテーションを完成させた後、発表内容の確認や、発表において自信がない箇所の強化を目的とした発表練習を行った。本時のリフレクションでは、生徒が自身の発表を振り返ることをねらい、ルーブリックを用いて自己評価させたところ、全体における評語(A, B, C)の分布は以下のような結果となった。

[生徒の自己評価の分布(第11時)]

評価	A	B	C
%	54.2	40.8	5.0

以下は生徒のリフレクション記述である。

[今日の発表練習で、自分が特に頑張ったことを教えてください。]

- 内容をしっかりと、メモに沿って話すことが出来た。また、作ったスライドを効果的に使いながら発表することが出来た。
- 今日ではできるだけメモを見ずに発表をすることができました。しかし、表情やジェスチャーをうまく使えなかったため、次回はそこを改善したいです。
- メモをあまり見ずに、スピード感や抑揚に気をつけて発表すること。今回、メモを書き直し、最初よりかなり短いメモのみにした。少なくともすることで自然と顔が上がるようになってしまったから。また、(中略)聞いている人に注目してもらえらると思うから、アクセントなどに気をつけた。

【第12時】

学習班で練習した後、班をシャッフルし、発表活動（パフォーマンステスト）を行った。班のシャッフルと発表は2回実施し、流暢さを高めるために1回目の発表時間は1分30秒、2回目は1分15秒とした。前時と同様にルーブリックを用いて自己評価させたところ、評語の分布は以下の結果となった。

【生徒の自己評価の分布（第12時）】

評価	A	B	C
%	74.8	22.6	2.6

以下は生徒のリフレクション記述である。

【今日の発表練習で、自分が特に頑張ったことを教えてください。】

〇はっきりとした大きな声で喋ること、なるべく相手の方を見ること。一回目は原稿を殆ど見た状態での発表だったけれど、2回目はメモをちょっと見て発表することができた。また、間違えても表情に出さずにプレゼンを続けることができた。

〇できる限り、原稿を見ずに相手に「プレゼントする」という意識を持ちながら発表することができました。ですが、思っていたより時間がなかったのと自信をもって発表することができていなかったように感じたので、もっと自信をもって話せるようにしたいと思います。また、順序を立てて発表することもできていたと思ったのでよかったです。

〇今日の発表では傍観者を見ながら発表することができました。できるだけメモを見ずに話すことはできましたが、ジェスチャーには課題が残ったので、今後改善していきたいです。

【第13時】

本単元の振り返りを行った。

【この単位では、プレゼンテーションを2回（第7時・第12時）実施しました。上手に発表ができたと感じたのは、どちらですか。】

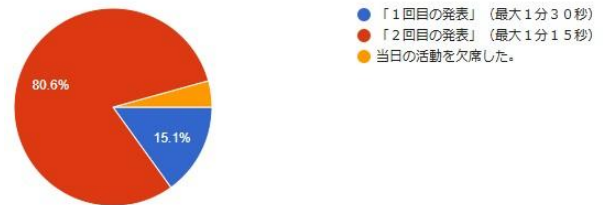


【2回目（第12時）のプレゼンテーションが上手にできたと感じる理由を入力してください。】

〇カルガリーのプレゼンでは、スライドの作成に時間がかかり十分な練習ができずに本番を迎えてしまったから、自信をもって発表できた今回のプレゼンのほうが良かったと思います。

〇カルガリーの方は準備が足りておらず、納得のいく結果ではなかった。プレゼンの資料作成に時間を取ってしまいプレゼンの練習ができておらず、更に原稿も頭に入っていなかったため散々な結果になってしまった。旭川の魅力については計画性をもって自分なりの方法で努力でき、それに伴った結果が出せた。

【旭川市の魅力を向上させるためのプレゼンテーション（第12時）では「1回目の発表」と「2回目の発表」を実施しました。2回を比較して、上手に発表ができたと感じたのは、どちらですか。】



【「2回目の発表」が上手にできたと感じる理由を入力してください。】

〇一回目の発表では、途中単語が抜けていたり、発表の順番がわからず、メモをたくさん見てしまっていたりして、トラブルが多かったのですが、二回目ではメモに言葉を付け足すなどをし、スラスラと話すことができたので良かったです。

〇1回目の発表から改善点を考え、2回目はよりよく発表ができていたと思います。2回目のほうがメモを見ないで話すことができていたと思いました。

本時では、「1回目の発表」と「2回目の発表」の間に、必要に応じてアレンジを加えてよいこととした。

【「1回目の発表」を受けて、「2回目の発表」の内容や方法をアレンジしましたか。】



【（アレンジした生徒）その結果、2回目のプレゼンテーションは上手にできましたか。】



[上手にできたと感じる理由を入力してください。]

○アレンジをした結果、より伝わりやすくなったと思ったからです。また、スピードも少しゆっくり話すことができたと思います。

○いらなと思った内容はなくすや順番を変えることで、一回目よりもスラスラと英語が出てきて、アイコンタクトなどの発表の仕方の方を工夫することができたと思ったからです。

[(アレンジしなかった生徒) アレンジしなかった理由を入力してください。]

○アレンジしたら、自分の中で次に何をいえばよいのかがごちゃごちゃになりそうだなと思ったからです。

○発表の仕方の方を重点的に、話すスピードや声の大きさ、聞いている人を見るなどのことをよりよくしたいと思ったから。

○アレンジするアイデアは思いついたが、そうすると聞いている人が何を言っているのかわかりにくくなってしまったから。

第7時(カルガリー大学の留学生を対象とした発表)と第12時(単元末のパフォーマンステスト)では準備にかけることのできる時間に差があったことから、発表資料の作成にかかる時間が長くなった分、発表練習を十分に行うことができなかったという趣旨の記述が見られた。しかし、その経験を単元末のパフォーマンステストで改善しようという意志や、回数を重ねるごとに自信がついたことで、完成度を高めようと即興的に発表をアレンジしようとしたことが伺える。

6. 研究の成果

本校英語科では、今次研究の主題を「生きた英語で積極的にコミュニケーションをする生徒の育成」と掲げて、前年度から研究を進めている。

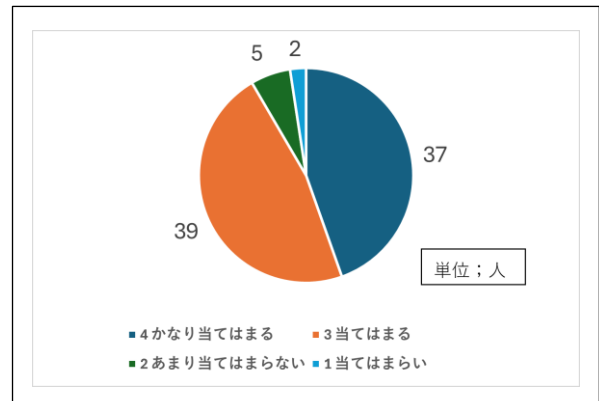
本稿では、これまで主に2年次研究について述べてきたが、以下に本研究の成果と課題、および今後の展望を述べる。

6.1. 研究の成果(実践1)

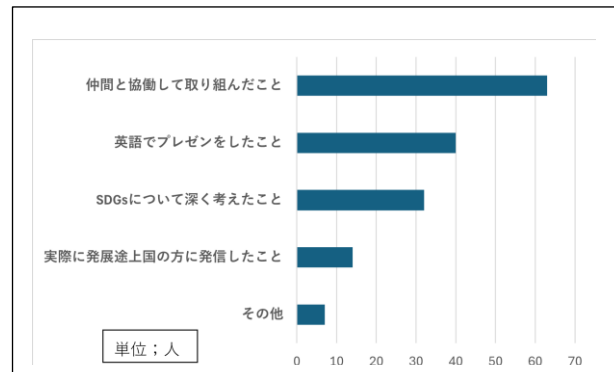
本校英語科の2年次研究では、副題を「協働的な言語活動を活性化するための授業デザインの研究」とし、協働で探究する中で、多様な方略を用いながら、自己の英語力を向上させることができる生徒や、自己の役割を認識し、課題解決に向けてエージェンシーを發揮することができる生徒の育成を目指した。

研究の成果を確認するにあたり、第3学年の生徒(83人回答)から以下の意見があった。

[Q1 本プロジェクトの取り組みは楽しかったか。]



[Q2 本プロジェクトでどのようなことが楽しかったか。] 上位2つ回答



Q1の回答を見ると、76人の生徒が本プロジェクトを楽しかったと回答しており、その理由として、「仲間と協働して取り組んだこと」と回答している生徒が多い。また、その他の回答で「私自身何ができるか深く考えることができたことや、みんなが関わりやすい話題かつ実際にどのような活動をしていて個人でするならどの活動がいいのか考えることができました。」「SDGsについて表面的な問題しか知らなかったため、このプロジェクトを通してSDGsの具体的な解決策や自分にできる簡単なことを知る、いい機会になったから。また、仲間と協力しながら学習を進めることで、作業を分担して効率的に学べたり、自分の得意不得意を活かしたりしながら学ぶことができたから。」という意見もあった。これらの意見は、PIES原理の自分の強い点を生かして弱い人を助けたり反対に自分の弱い点を教えてもらったりするPositive interdependence(肯定的相互依存)に該当し、一人一人が個人の責任をとり発表をするIndividual Accountability(個人の責任)にも当てはまると言える。

[Q3 本プロジェクトでの協働的な学びを通して何を身につけることができたか。] *生徒の回答を教師が分類

1 仲間と協力して得意なことを生かし補完し合いながら進める力	20人
2 協力したことによる新たな価値観	18人

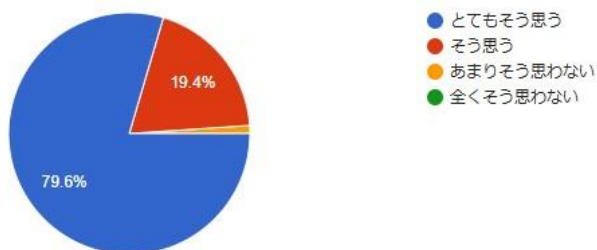
3 役割分担を明確にしたことによる自己責任感	15 人
4 価値観の異なる集団におけるコミュニケーション力	12 人
5 場面、目的、状況を意識した必要な語彙力や表現力	8 人
6 課題を自分事として捉える方	5 人
7 それ以外(平等など)	5 人

この結果から PIES 原理の Positive Interdependence (肯定的相互依存)が最も多く、その次に Simultaneous Interaction (同時相互作用)の結果、新たな価値観を生み出したことがわかった。また、一人一人が責任をもち取り組む Individual Accountability (個人の責任)も 15 人いた。回答した 83 人の回答は、ほぼ PIES 原理に当てはまるものである。このことが、実際に英語を使用し、他者と関わり合いながら学びを深めていったことがわかる。また、team で学び合い、教え合う学習プロセスが構築された結果だとも考える。

6. 2. 研究の成果(実践2)

単元を振り返る活動の際に、探究を軸とした発表活動についてアンケートを行った。

[Q1. 同級生と協働することは大切だと思いますか。]



[Q2. プレゼンテーションの作成では、学習班の同級生と役割を分担し、協働する機会を設けました。あなたはどのようなことを考えたり、感じたりしましたか。]

- 協働することで自分一人ではできなかったことも協力することで作成したときにスムーズに取り組んでいくことができよかったですと思います。
- それぞれの得意な分野を活かすことができるため、効率的に作業を進めることができました。また、意見がぶつかることもありましたが、議論することでより考えが深まったので、協働作業が大事だと感じました。
- ネットで調べるよりも、友だちに聞いたほうが早く、ネットで調べられない表現の仕方や文章を読んで感じたことについて教えてくれるので、客観的に作りやすく、質の高いもの担ってよかったですと思います。

○私は、主に原稿を考える役割になりましたが、それぞれ役割分担した部分だけをこなすのではなく、お互いに改善したら良いところの意見を出し合って作っていくことができました。自分の担当以外のところも少なからずは関わって、「このイラストや写真を入れたら良くなる」、「この単語はこれに変えたほうが分かりやすい」などの話し合いを重ねて対話しながら作業することが一番大切だと感じました。

○今回の活動時間は少なく、スライド作成や原稿の作成が一人では難しかったと、今振り返れば思います。協働すること、役割分担をすることは大切だと感じました。

○それぞれが役割をしっかりこなすことで、効率よく良いプレゼンを作ることができた。一方で、班内での情報伝達を上手く行わないと、資料内容とメモ内容が変わってしまうと感じた。

○自分の得意なことを活かして班に貢献できたのがとても嬉しかったし、達成感がありました。ですが、人に合わせたりするのが時間や考え方などの違いで、少し難しいと感じる部分もありました。

○僕は、自分の担当する役割でないところの様子も適宜見ていくことが大切だと思いました。役割分担をして自分の担当する仕事を完璧にこなすことは当たり前ですが、自分の担当以外も見ることで何かがあったときに対応しやすくなるので、他の人のことも忘れないことが大切でした。

○計画よりも遅れているところを班員全員で作業した。分担することは効率よく進めることができる手段としては有効だが、複数人で行うことで多面的、多角的に考えることができるため、場面によって使い分けが必要だと感じた。

○あまり役割を分担しない方がいいように感じました。誰かがしっかりとその役割をしてくれないと他の人にすごく迷惑がかかってしまうので、臨機応変な対応をして、完全に分担しないでやることも大切だと感じたからです。また、データ収集が終わったらもうやるものがなくなってしまうからです。

○どのように関わって作業を進めていくか、どのように作れば班員が全員納得するのかを考えて取り組むことが出来た。

○他の人と一緒に作るから考え方ややりたいことが違ってみんなが同じ方向に揃うまでに時間がかかってしまうのでそこが難しかったです。

Q1. の結果から、同級生と協働することが大切だと考える生徒が非常に多く見られる。Q2. の記述は、赤文

字は協働することで生徒ができるようになったと感じていることを表し、青文字は生徒が困難や課題を感じたことを表す。

本単元では、学習班のメンバーで「原稿作成」「スライド作成」「データ収集」「図表・イラスト作成」の4つのチーフを分担する形態をとった。役割を分担することで自分の得意なことを活用したり、メンバーの仕事の進捗状況を補ったりすることができるという意見が多くみられたことが成果として挙げられる。

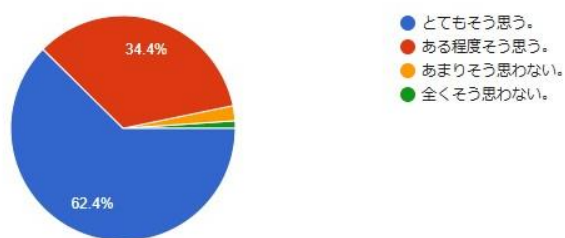
一方で、メンバー間での方向性を整えることに困難を感じた生徒や、メンバーそれぞれがもつ情報を共有する際に、十分なコミュニケーションを図ることができなかったと感じた生徒が見られた。

これらは PIES 原理において、学習者同士が相互に助け合わなければ目標を達成できない状態を作り出す積極的な相互依存の要素と、各個人が自分の役割を果たすことに責任をもつ個別責任の要素に該当するものと考えられる。より多くの生徒が同級生と助け合ったり、自分の責任を果たしたりすることができるような役割分担を、教師は設定する必要がある。

また、学習者エンゲージメントにおいて、学習者同士の交流や協力の程度を指す社会的エンゲージメントの要素と、批判的思考や問題解決に向けた積極性を指す認知的エンゲージメントの要素に該当するものと考えられる。同級生との協力の状況や、生徒が発表しようとしている内容について、適宜フィードバックを与える必要があると考えられる。

前述のアンケートと同時に、他者参照を基盤とした学びについてアンケートを行った。

[Q3. この単元では、表計算ソフトを用いて情報や英作文を共有する活動を行いました。知識を広めたり、考えを深めたりするのに役立ったと思いますか。]



95%以上の生徒が肯定的な回答をしているが、否定的な回答をした生徒の割合が3%いた。

本単元の指導では、生徒が直接表計算ソフトに入力する形態をとった。本単元における取組を基に、より効率的な集合知の形成を図ることを目的に、オンラインフォームで収集した情報を表計算ソフトでまとめ、共有する方法に変更した。



表計算ソフトのセルの様子(改良版)

出席番号が偶数の生徒が「受け身の文の肯定文と否定文担当」、奇数の生徒が「受け身の文の疑問文(単純疑問文と疑問詞を使った疑問文)」という形態で役割を分担し、限られた時間の中で、文を作る際の留意点と、オリジナルの例文を入力する。教師はこのデータを添削し、必要に応じて朱書き訂正を加えたり、コメント機能を使ってフィードバックを与えたりする。その後、生徒が適宜この表を参照するよう促す。

この学習方法によって生徒の定着度が深まるかについて、今後検証を重ねる必要がある。

注釈

- *1 生徒が既習事項の中から必要なものを自分で選んで(即興で)話す活動。日頃の授業でターゲット・センテンスを主に練習させることで終わらずに、それまで習ったことを活用するために、生徒が自分で選び、話す時間を作ることによって、コミュニケーション能力を育成する活動。
- *2 「OECD Learning Compass 2030 仮訳」より、変化を起こすために自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力と捉えている。

参考文献

- (1)文部科学省.「新学習指導要領解説 外国語編(2019年7月)」.p135
- (2)文部科学省.「学習指導要領解説(平成29年7月)」
- (3)文部科学省.「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言」
- (4)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(67)」
- (5)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(68)」
- (6)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(69)」
- (7)松浦伸和.「中学校外国語科における「主体的・対話的で深い学び」の学習指導の改善と充実」.公益財団法人日本教材文化jij研究財団.2017
- (8)西岡加名恵.「逆向き設計」で確かな学力を保障する」.明治図書.2008
- (9)加藤幸次.「個別最適な学び・協働的な学びの考え方・進め方」.黎明書房.2022
- (10)奈須正裕.「個別最適な学びと協働的な学び」.東洋館出版社.2021
- (11)和泉伸一.「第2言語習得と母語習得から「言葉の学び」と

考える」.アルク.2016

(11)大修館書店.「英語教育 5月号」.2022

(12)大修館書店.「英語教育 7月号」.2022

(13)高橋昌由.「英語×『主体的・対話的で深い学び』」.大学
教育出版.2021

(14)山岡大基・田頭憲二.「英語授業デザインマニュアル」.
大修館書店. 2023

(15)廣森友人.「改訂版 英語学習のメカニズム」. 大修館書
店. 2023

(16)Kagan, S. (2001) . Kagan Structures and Learning
Together-What is the Difference?
[https://www.kaganonline.com/free_articles/dr_spencer_ka
gan/](https://www.kaganonline.com/free_articles/dr_spencer_kagan/) ASK13.php